

大学の日本語授業における グループワークのデザイン 言語生態学を理論背景とした研究

杨 峻 / 著

大学日语课堂中小组 活动的设计方案 以语言生态学为理论背景的探讨



外文出版社
FOREIGN LANGUAGES PRESS

大学の日本語授業におけるグループ ワークのデザイン

言語生態学を理論背景とした研究

大学日语课堂中小组活动的设计方案 以语言生态学为理论背景的探讨

杨 峻◎著

图书在版编目 (CIP) 数据

大学日语课堂中小组活动的设计方案 :
以语言生态学为理论背景的探讨 / 杨峻著 .

北京 : 外文出版社 , 2010 .

ISBN 978-7-119-05442-1

I. ①大… II. ①杨… III. ①日语-课堂教学-课程
设计-高等学校 IV. ① H369.3

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2010) 第 076339 号

责任编辑 : 郭雅坤 马彦荣 陈丝纶

封面设计 : 姚 波

内文设计 : 姚 波

印刷监制 : 冯 浩

大学日语课堂中小组活动的设计方案 以语言生态学为理论背景的探讨

作 者 杨 峻

湖南理工学院图书馆



Z1245728

© 2010 外文出版社

出版发行 : 外文出版社 (中国北京百万庄大街 24 号)

邮政编码 : 100037

网 址 : www.flp.com.cn

电 话 : 008610-68320579 (总编室)

008610-68995852 (发行部)

008610-68327750 (版权部)

制 版 : 北京维诺传媒文化有限公司

印 刷 : 北京外文印刷厂

开 本 : 787mm × 1092mm 1/16 印张 : 11.5

2010 年第 1 版第 1 次印刷

(日)

ISBN 978-7-119-05442-1

03800 (平)

版权所有 侵权必究 有印装问题可随时调换

序

多年来，我国大学的日语教学一直延续的是以教师和课堂教学为中心的模式，近年来随着一些新的教学理念和方法的引入，很多教师和学生都意识到学习一门语言是为了用于交际，而传统的教学模式对于培养学生的语言交际能力收效甚微。针对这种现状，近年来一些学校开始尝试将交际法和任务型教学法导入课堂，很多教材也把此类的练习活动编写入册。然而，在实际的课堂上，教学效果依然不够理想。这主要是因为长年以来，教师和学生对于传统的模式比较习惯，虽然了解其弊端，但是不知从何处下手去加以改变。可以说，如何打破现状是我们面临的一个难题。

本专著凝集了作者为解决这一难题而刻苦学习和努力实践的成果。在书中，著者以语言生态学为理论依据，对语言的本质进行了探讨，并且提出了合作学习的研究课题。语言生态学对传统的“外语学习即从零开始”的理念提出了批判，强调一种语言和另一种语言之间是相互依存的关系，在学习外语的时候，如何调动和发挥以母语为基础的各种能力是至关重要的。同时，语言是人际交流的工具，是在人类交往和共同进化的过程当中产生和发展而来的，语言生态学提倡通过人和人之间的合作来开展语言学习活动。

本专著不仅对于语言生态学以及合作学习的理论进行了具体地阐述，而且通过真实的数据对课堂教学活动进行了定性和定量的分析。该书中，著者以语言生态学为理论背景，以大学日语专业的精读课为对象，围绕着如何保全学生的语言生态这一主题展开研究。著者从改善学生的语言生态环境和发挥学生已有能力的两

个角度，对于在课堂中导入以合作学习为宗旨的小组活动进行了实证性研究，提出了具体的实施方案。

著者2005年受教育部选派赴日本御茶水女子大学攻读博士学位，2007年考入博士课程，在著名日语教育学和语言生态学专家冈崎眸教授的指导下，全身心地投入学习研究，以优异的成绩顺利地完博士课程，获得博士学位。这部专著是著者在博士论文的基础上修订而成的，具有较高的学术价值。

我们期待本专著的内容能够为活跃在第一线并立志于教学改革的日语教师、以及计划撰写日语教育学方向硕士论文和博士论文的研究生，提供一定的参考和帮助。同时，书中记录了许多当代大学生对于外语学习的想法以及他们在小组合作学习活动中的话语和表现，相信对于学习日语的同学们也会有一定的启发作用。

北京外国语大学 教授

曹大峰

2010年4月于北京

目 次

第1章 序論...1

1.1. 問題の所在...1

1.1.1. 中国の大学における日本語専攻学習者の日本語の生態...1

1.1.2. 中国の大学における日本語専攻学習者の学習環境...2

1.1.3. 日本語専攻主幹科目―「精読」―の現状...3

1.2. 中国人学習者を対象とするグループワークの課題...5

1.3. 本書の構成...8

第2章 言語生態学から見た言語生態の保全...11

2.1. 本章の概要...11

2.2. 言語生態学の基本的な考え方...11

2.2.1. 言語生態学における言語の捉え方...12

2.2.2. 基本概念：言語生態、言語生態環境、
言語生態の保全・育成...13

2.2.3. 言語生態の保全方法...14

2.2.3.1. 言語生態・人間生態の保全...14

2.2.3.2. 言語生態の保全方法―言語生態環境の改善―...16

2.3. 言語教育への生態学的アプローチ...17

2.3.1. 既有能力重視と言語生態・人間生態の保全...17

2.3.2. 言語生態環境の改善...19

2.4. 協働学習...20

2.4.1. 協働学習の基本的な考え方...20

2.4.2. 言語生態学から見た協働学習...22

2.5. 本研究の理論的枠組み...24

2.6. 本章のまとめ...27

第3章 言語生態保全の観点から見たグループワーク...29

3.1. 本章の概要...29

3.2. グループワークを導入することの妥当性の検討ーグループワークと中国人学習者の言語生態環境との適合性ー...30

3.2.1. 言語生態環境の社会的領域：中国人学習者のグループワークの参加様相...30

3.2.2. 言語生態環境の心理的領域：中国人学習者の持つ言語学習観...32

3.2.2.1. 中国人学習者を対象とする言語学習観に関する意識調査...32

3.2.2.2. グループワークに対する中国人学習者の受け止め方...36

3.3. 第二言語教育におけるグループワーク論...37

3.3.1. 第二言語教育におけるグループワークの展開...37

3.3.1.1. 教育的観点...38

3.3.1.2. 第二言語習得の観点...39

3.3.1.3. 協働学習の観点...41

3.3.2. 協働学習研究の成果と課題...42

3.4. 本章のまとめ...47

第4章 研究目的と方法...48

4.1. 本研究の目的と課題...48

4.2. 研究方法...50

4.2.1. 実践概要...51

4.2.1.1. フィールドの概要...	51
4.2.1.2. 実施期間...	52
4.2.1.3. 対象者...	52
4.2.1.4. グループワークの実践方法...	52
4.2.1.5. グループワークの概要...	53
4.2.2. データ収集...	55
4.2.2.1. データ収集の手順...	55
4.2.2.2. 質問紙の作成...	56
4.2.2.3. 振り返りシート...	56
4.2.2.4. インタビューの手続き...	56
4.2.2.5. 文字化原則...	58

第5章 グループワーク導入後の言語生態環境の実態...59

5.1. 本章の概要...	59
5.2. グループワーク導入後の言語生態環境社会的領域の実態 —グループワークにおける学習の質—【研究1】...	60
5.2.1. はじめに...	60
5.2.2. 先行研究...	61
5.2.3. 研究目的と課題...	63
5.2.4. 研究方法...	63
5.2.4.1. 活動の概要...	63
5.2.4.2. 分析方法...	65
5.2.5. 結果と考察...	66
5.2.5.1. 課題1の結果と考察...	66
5.2.5.2. 課題2の結果と考察...	68
5.2.5.3. 課題3の結果と考察...	69
5.2.6. 研究1のまとめ...	75
5.3. グループワーク導入後の言語生態環境心理的領域の実態 —言語学習観—【研究2・3】...	76
5.3.1. 日本語専攻学習者の持つ言語学習観の全体像と特徴	

【研究 2】 ...77	
5.3.1.1. 先行研究及び研究課題...77	
5.3.1.2. 分析方法...78	
5.3.1.3. 課題1の結果と考察...78	
5.3.1.4. 課題2の結果と考察...86	
5.3.1.5. 研究2のまとめ...91	
5.3.2. グループワークに対する受け止め方の形成プロセス	
【研究 3】 ...92	
5.3.2.1. はじめに...92	
5.3.2.2. 研究目的と課題...93	
5.3.2.3. 分析対象者と分析方法...94	
5.3.2.4. 結果と考察...95	
5.3.2.5. 研究3のまとめ...109	
5.3.3. 研究2・3のまとめ...109	
5.4. 本章のまとめ...110	

第 6 章 グループワークにおける言語の使われ方と日本語生態の保全【研究4】 ...113

6.1. はじめに...113	
6.2. 先行研究...114	
6.3. 研究目的と研究課題...116	
6.4. データと分析方法...117	
6.5. 会話活動における言語の使われ方...117	
6.5.1. ベース言語の日本語で達成していること...117	
6.5.1.1. 会話例に倣った質疑応答...117	
6.5.1.2. 会話の拡張...118	
6.5.1.3. 発話生成の補助...119	
6.5.2. 中国語へのコードスイッチングにより達成していること...120	
6.5.2.1. 伝えたい意味を明確化する...120	
6.5.2.2. 文法上の間違いを正す...121	

6.5.2.3. 意味の明確化要求とそれに対する説明...	122
6.5.2.4. 応答の内容を検討する...	123
6.5.3. 会話活動における言語の使われ方のまとめと考察...	125
6.6. 翻訳活動における言語の使われ方...	127
6.6.1. ベース言語の中国語で達成していること...	127
6.6.1.1. 日本語訳を確認する...	127
6.6.1.2. 日本語訳を比較する...	129
6.6.1.3. 日本語訳を統合する...	131
6.6.1.4. 日本語訳を探索する...	133
6.6.2. 日本語へのコードスイッチングにより達成していること...	136
6.6.2.1. 日本語訳を述べる...	136
6.6.2.2. 日本語訳の完成を補助する...	136
6.6.3. 翻訳活動における言語の使われ方のまとめと考察...	137
6.7. 研究4のまとめと総合的考察...	137
6.8. 本章のまとめ...	139

第7章 総括...142

7.1. 本研究の結果...	142
7.1.1. 課題1の結果【研究1・2・3】...	143
7.1.2. 課題2の結果【研究4】...	145
7.2. グループワークのデザインへの提起...	145
7.2.1. 高度な日本語運用の担保...	146
7.2.2. 母語の活用...	147
7.2.3. グループワークのデザインについて...	147
7.2.4. グループワークで扱う内容について...	149
7.3. 今後の課題...	151

参考文献...153

付録...163

付録1 精読教科書の練習問題...163

付録2 質問紙...165

付録3 振り返りシートの例示...167

付録4 分析ワークシートの具体例...168

后記...171

第1章

序論

■ 1.1. 問題の所在

1.1.1. 中国の大学における日本語専攻学習者の日本語の生態

人間は言語を媒介にさまざまな人間活動を実践する。言語の持つ認知、社会、情意、文化などの諸機能がどのように機能するかによって、人間活動の質に大きな影響を与える。言語が十全に機能すれば、人間の営む諸活動は十全に展開され、人間のあり方としてよい状態に保たれる。逆に、言語が十全に機能しない場合、人間の諸活動は十全に展開されることが難しくなり、人間の状態も万全ではなくなる。言語が十分機能しているかどうかという言語の状態は言語生態と呼ばれ、言語生態は人間の状態、つまり人間生態と緊密に関係している (岡崎敏雄2008c)。

中国の大学で日本語を専攻している学習者の言語生態はどのようなになっているのだろうか。日本語専攻の学習者は、母語である中国語と目標言語である日本語の二つの言語を持っている。この二つの言語は互いに関わり合い、言語の生態系をなしているというように捉えることができる。中国語の生態に目を向けると、学習者は母語の中国語で培ってきた認知、情意、社会、文化などの既有能力を有し、それらに基づく諸機能を十全に発

揮している。他方、日本語の生態に注目すると、学習者は日本語の文法には詳しいが、日本語でうまくコミュニケーションをとれないと指摘されている(蔡2006)。この指摘から、学習者は日本語に関する知識はたくさん蓄積しているが、その日本語は、コミュニケーションの道具としては機能していないということが窺える。つまり、日本語について豊富な言語知識を持っているにも関わらず、その知識は彼らの人間活動を支えきれていないということになる。

グローバル化が進む中、中国と日本は経済や貿易をはじめ、さまざまな分野で物的交流と人的交流が深まってきている。中国社会では、日本語を使って現実場面で仕事を成し遂げられる人材に対する需要が高まっている。他方、日本語専攻の日本語学習者も「将来日系企業に就職すること」を日本語学習の目的として挙げている¹。このことから、彼らには実用的な日本語力の獲得というニーズがあることが分かる。しかし、現実には、先に見たように、彼らの日本語運用力は満足できる状態にはない。以上のことから、言語知識はあるものの運用力が十分でないという日本語専攻学習者の日本語生態を、運用に知識を結びつけた状態に導いていくこと、言い換えれば、彼らの日本語生態を保全することが喫緊の課題となる。

これまで、第二言語教育の分野では、第一言語と第二言語を分離した存在として捉え、学習者の第一言語で培ってきた既存能力を、如何に第二言語学習の過程で発揮させるかを考慮せず、第二言語のみに注目して第二言語能力を育成しようとしている。本研究では、第一言語と第二言語が、両方で言語生態系をなす統合的な存在であるという捉え方から、第二言語能力の育成に当たって、第一言語で培ってきた学習者の既存能力をどのように発揮させるかに注目して、日本語専攻学習者の日本語生態の保全を実現するあり方を考えていきたい。

1.1.2. 中国の大学における日本語専攻学習者の学習環境

上述の、言語知識が言語運用に結びつかないという日本語生態の悪さの

¹ 国際交流基金2009年度の調査によると、中国の大学の日本語専攻の学習者は、全体的に研究志向よりも実務志向(ビジネス、観光等)が高く、卒業後は日系企業に就職する学生が多いという。また、学習目的としては、「将来の就職のため」が最も多い。(URL: <http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/country/2009/china.html>)

原因の一つは、彼らが受講している日本語授業のあり方に求めることができると考えられる。岡崎眸(2008a)は、中国の大学日本語教育の教室学習環境を、授業内容、授業形態、授業の場の3点から捉え、この学習環境が提供できる日本語学習を運用力養成の観点から検討したものである。まず、授業の内容を「教師が文法を説明し、学習者がそれを理解する」として、授業の形式を「講義による一斉授業」として、授業の場を「教室前面に固定された教卓とそれに対面する固定机がつくる学習空間」として特徴づけ、この三つが一体化して学習環境が形づくられていると述べている。そして、この学習環境でつくりだされる日本語学習の特徴として、日本語によるコミュニケーションの機会が極めて限られていること、学習のすべてが教師によって管理されていることの2点を挙げ、このような学習環境の下では、日本語運用力の養成、及び自律的学習能力の養成に難点のあることを指摘した。

この指摘に見られるように、中国の大学日本語教育の教室内学習環境は、授業内容(文法・文型知識の積み上げ)、授業形式(教師一斉授業)、教室空間の設計(教室前面の黒板と対面して配置された固定式机)が一体化して、効率的な日本語学習を提供するのに役立っている。しかし、この効率性は、豊富な日本語知識の蓄積という点での効率性であり、日本語運用力の養成という点での効率性ではないことに注目したい。言語知識を言語運用に結びつけ、言語運用を支える言語知識とするためには、教室という学習環境自体に注目してその改善を図ることが必要だと思われる。

一方、学習環境は教室内にとどまらず、教室外の学習環境も重要である。ただし、本研究では、海外の日本語学習にとっては、相対的に影響の大きいと考えられる教室内の学習環境に注目する。教室内に目を向ける場合、日本語専攻の主幹科目として日本語カリキュラムの中心に位置づけられている精読²という日本語の授業が、学習者の日本語学習のあり方に最も影響を与えると考えられる。次節では、この精読の現状及び問題点を概観する。

1.1.3. 日本語専攻主幹科目—「精読」—の現状

「精読」は別名「総合日本語」や「基礎日本語」とも呼ばれ、中国の大

² 詳しくは後述。日本で言われている読解の授業ではない。

学で日本語を主専攻とする学部生を対象に各学年に設置されている科目である。精読は日本語カリキュラムの中で主幹科目として位置づけられ、長い歴史を持っている。特に、基礎段階³(学部1年、2年)の精読では日本語の発音・文字の導入から始めて、基本的な語彙・文法の力を習得し、基礎的な運用力を養成する総合的な日本語科目として位置づけられている(篠崎2006)。この基礎段階で精読には週に8時間から10時間も当てられ、日本語授業の時間総数の約三分の二を占めている(林2005)⁴。このようなことから、精読は基礎段階の日本語学習において重要な役割を果たしていると言える。

精読授業において採用されている教室活動は、大学によって多少の違いがあるものの、「新出単語の説明」、「文法項目の説明」、「本文の説明」、「応用練習」はどこの大学の教育現場でも外せないポイントである。以下は授業の進め方を、教室活動を中心にその概略を紹介したものである。

一般的には、精読授業は教師の新出単語に対する説明で始まる。ここで、教師は学生に新出単語を音読させたり、単語の意味用法について説明を与えたりする。この新出単語の説明が終わると、教師はこの課の新出の文法項目を並べて説明するか、または本文を読みながらそこから文法項目を取り出して説明する。その時、教科書に書かれている文法解説に従って文法に関する知識を学生が理解できるように噛み砕きながら丁寧に説明し、次いで学習者に例文を与えたり、中国語の文を日本語に訳させたりすることで学習者の理解の促進を図る。本文の説明に関しては、書かれている内容ではなく、使われている日本語の音読と文型や表現の確認が重視される。最後に行われる応用練習部分では、教師の指示の下で、学習者が教科書に載っている練習(朗読、穴埋め、置き換え、翻訳)などをする。

以上から分かるように、現行の精読授業は、教師の指導の下に文法学習を中心に据え、一斉授業の形で進められていることに特徴があると言える。

³ 学年が進むと(学部3年、4年)、精読では主に日本語で書かれている文学作品などを読むことが中心になっている。

⁴ 基礎段階で会話、聴解の授業も設置しているが、いずれも精読を支えるサブ科目として扱われている。

日本語の授業時間数の大半を占める精読授業では、学習者には主に教師の文法説明を軸に展開される講義を聞いて理解することが求められる。応用練習の時間が設けてあるとは言うものの、その練習は日本語の運用に力点を置くというより、ここでも、文法知識に対する理解の促進が目指されている。その結果として、学習者は授業で日本語の知識をたくさん獲得できるものの、知識を実際に運用する場は限られている。必然的に学習者の日本語生態は、上述したように、豊富な文法知識と貧しい運用力に見られるような状態に陥っていると考えられる。

中国では、20世紀90年代から小中学校を中心に教育改革が実施され、近年、大学でも教育の改革が提唱され、知識伝授型の教育から学習者の主体性を重視する教育へと転換することが求められている⁵。こうした社会的背景の下で、従来の精読の授業のあり方に対して、現場では新たな外国語教授法への関心が高まり、「学習者の能動性が軽視されている」(曹2005)、「学習者のニーズと採用されている教授法の間にギャップが存在する」(楊峻2006)、「文法知識には詳しいが運用力が十分養成されない」(蔡2006)などの問題点が指摘され、精読授業の改善を求める声が高まっている。しかし、精読の授業改革に対する提起が多く見られてはいるものの、実証的な手続きを踏んで提起されているものは少ない。こうした状況にに応じて、本研究は、精読授業の改善策としてグループワークの導入を提唱し、その導入法を実証的に提起していく。さらに、グループワークの導入による精読授業の改善を通して、学習者の日本語生態の保全を目指すものである。学習者の日本語の生態が保全されることで、彼らの人間生態にもよい影響をもたらすと考えられる。

■ 1.2. 中国人学習者を対象とするグループワークの課題

本研究では教師一斉授業の形に対して、学習者同士によるペアを含むグループの学習形態を取り上げ、グループワークと呼ぶ。具体的には、

⁵ 2007年、中国の教育部により、「关于深化本科教学改革全面提高教学质量的若干意见(大学における教育改革の深化及び教育の質の全面的向上に関する条項)」が公布された。(URL: <http://www.zlgc.org/Detail.aspx?id=1157>)

Cohen(1986:1)の定義に従い、少人数の学習者が一つの課題を達成するために、協働的に働くグループ形態の学習活動をグループワークとして考える。

グループワークはコミュニケーション・アプローチ⁶が言語教育に取り入れられる過程で、言語教育現場でも導入されるようになってきたものである。グループワークを授業に導入した場合、学習者が主体的に学習を進めることになり、第二言語を運用する機会が大幅に増加し、学習者間のやりとりを通してコミュニケーション能力が養成されていくことが期待されている。ここで注目したいのは、コミュニケーション能力という場合、単に第二言語でどれほど他者と意味疎通がはかれるかだけでなく、他者と如何に社会的人間関係を作ることができるかもまたコミュニケーション能力の範疇に入ることである。つまり、第二言語のコミュニケーション能力の養成によって、第二言語の力とともに、他者との関係性構築技能も学ばれていくのである。この点は、特に、近年、中国で大学生の対人関係の心理的障害の問題が注目されている中(第2章を参照)、日本語専攻の学習者にとっては、言語学習の過程で他者との関係性構築の方法を学ぶことが彼らの人間としての成長にもつながると考えられる。

他方、言語教育の現場からは、中国人学習者を対象とする場合、グループワークという学習活動はなかなか展開しにくいという声が聞かれる。この理由として、儒教の影響で学習者は教師に従順で、教師主導型の学習を好むとして、中国人学習者の文化的背景に原因が帰結されている(ピビアン 1993)。つまり、中国人学習者の持つ文化的特徴はグループワークの学習とは合わないという捉え方である。しかし、このような捉え方には、グループワークが世界中どこでも、どんな学習者にも適合するはずの絶対的な学習法であり、もしその学習法が合わないとすれば、それは、学習者に問題があるとする短絡的思考が背後にあるのではないだろうか。このような問題の捉え方は、学習者の持つ経験や既有能力を十分発揮することで、グループワーク活動が十二分に実現されていることを全く見落としているものである。そこには、第二言語学習はゼロからはじめられるものだという考え方が背後にあると思われる。

⁶ コミュニカティブ・アプローチは、第二言語によるコミュニケーション能力を養成するために開発されてきた外国語教授理論であり、教室内でペアを含むグループの形の学習を通して外国語能力を獲得することが目指されている。